

氏 名 宋 琦

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 2210 号

学位授与の日付 2021年3月 24日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究  
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 江戸時代中後期における神儒仏三教思想——形態と構造の  
分析を中心に——

論文審査委員 主 査 磯田 道史  
国際日本研究専攻 准教授  
ジョン フリーン  
国際日本研究専攻 教授  
伊東 貴之  
国際日本研究専攻 教授  
末木 文美士  
総合研究大学院大学／国際日本文化研究センター  
名誉教授  
前田 勉  
愛知教育大学 人文社会科学系  
社会科教育講座 教授

## 博士論文の要旨

氏 名 宋 琦

論文題目 江戸時代中後期における神儒仏三教思想——形態と構造の分析を中心に——

本論文は、江戸時代中後期の神儒仏三教思想を主な研究対象に据え、その個別事例の形態分析を積み重ねることで、神儒仏三教思想の全体構造を抽出・考察するものである。近代以前の日本の思想空間において、神道・儒教・仏教は、最も重要な三つの学問体系だと見做されていた。とりわけ江戸中期以降、それら三教が鼎立したり習合したりといった多くの事例が出現することとなる。神儒仏三教思想の研究は江戸時代の思想史における重要な一環として意義が大きい。

中国では儒仏道の三教思想については広く知られており、それに関する研究蓄積も豊富である。しかし、多くの場合、三教思想は中国ばかりではなく、日本にも存在したことが看過され、日本の三教思想を正面から扱った研究は極めて少ないのが現状である。日本という一国の思想史にとどまらない広い視野で神儒仏三教思想を再評価するためには、その思想的な形態と構造とが明らかにされる必要がある。江戸中期以降、神儒仏三教思想は、様々な領域でほとんど時を同じくして出現し、鼓吹され、ときには批判を浴びることもあった。神儒仏三教思想の全体像を把握するためには、異なる領域でそれがどのように解釈されたかを理解することが重要である。その手掛かりとして、本論ではまず、同時代を生きた三人の人物、松宮観山（一六八六～一七八〇）、石田梅岩（一六八五～一七四四）、白隠慧鶴（一六八六～一七六九）による神儒仏三教思想を検討する。その上で、彼ら以外の神儒仏三教思想についても言及し、江戸中期以降の思想的見取り図を描く。以上の作業から、江戸中期以降の神儒仏三教思想の全体構造を明らかにし、日中の三教思想の異同について比較研究を試みる。各章の具体的な内容は、以下のとおりである。

第一章では、松宮観山の神儒仏三教思想を取り上げる。松宮観山は北条流兵学の継承者で、彼は国体論の角度から三教思想を論じた。そこでは、「教」と「道」との緊密な関係のなかで三教思想が展開され、神道を中心とする神儒仏三教思想が謳われた。晩年、観山は明和事件で死罪とされた山縣大弐と書簡を交わしたことで、江戸追放の憂き目を見るが、そうした経緯から、明治以降、尊王の人物として評価されることとなった。そこから「日本魂」の代表的思想家と見做されてきた松宮観山の神儒仏三教思想は、近代に創出された「日本人」としてのアイデンティティ、さらには後の国家神道の支柱となっていたことが分かる。

第二章では、石門心学における神儒仏三教思想について考察する。江戸期の民衆世界は、習合思想と密接なつながりがある。石田梅岩が提唱した石門心学は、民衆教化のなかで神儒仏三教思想を取り入れた。彼の思想において中心の地位を占めるのは神道だが、理論的な支えとなっているのは儒教である。梅岩の思想を要とする石門心学は朱子学の特徴を有しているが、実践面では陽明学の特徴を持ち、中国・明末の「三一教」に類似する民衆向けの教化運動だといえる。簡易な言葉で教えを説くことで、明治期以降も全国に影響を

与えることとなった。こうした心学の神儒仏三教思想は、民衆の道德、信仰などの理論的な根拠となったと見做されている。

第三章では、白隠禅師と東嶺円慈の三教観を取り上げる。研究史上では、近世仏教は墮落した仏教であるという議論が支配的であったが、実は、影響力のある僧侶を輩出した時代であった。臨済宗中興の祖としての白隠禅師は、宗派の正統的な法脈を継承しつつ、日本臨済宗のあらたな局面を創出した。彼は公案禅を再興し、道教の内丹法を運用して「軟蘇の法」という座禅法を広めた。彼は宗門のちがいには寛容な態度を示し、中国の宋明禅から三教一致の概念を受容した。その三教観は主に中国式の儒仏道であったが、弟子の東嶺円慈は白隠の寛容な思想的態度を継承し、明らかな神儒仏三教思想を唱えた。彼らの神儒仏三教思想は、信仰の場での思想の融合現象と考えられる。

第四章では、以上の三名以外の神儒仏三教思想に網羅的に目を配り、江戸中後期における、神儒仏三教思想の見取り図を描く。まずは二宮尊徳と大原幽学を取り上げ、農村の復興における神儒仏三教思想の形態を分析し、つづけて、武士道と三教思想との関係を考察する。神儒仏三教思想の擁護者は、士農工商のいずれにおいてもみられた。しかし、合理主義や自然科学的見地から神儒仏三教思想を否定する人物もいた。その代表として、富永仲基や山片蟠桃が挙げられる。さらに、神儒仏三教思想の内部構造を解明するため、神道・儒教・仏教それぞれの視点で江戸中後期の神儒仏三教思想のメカニズムを考察した。そして、以上の研究を踏まえ、日中の三教思想の比較を行った。思想の形態と構造という観点から見たとき、日中両国の三教思想は互いに異質なものである。そのなかで、テキスト研究の補助として、絵画資料である「三教図」を研究対象に、神儒仏三教思想の視覚的な表現方式を考察した。

さらに、補論として、神儒仏三教思想研究において「宗教」という概念がどのように扱われてきたか、分析を行った。今日の日本では、多くの人々の宗教観は曖昧なものだといえる。時代を溯れば、一八九三年に開催されたシカゴ万国宗教会議には、神道・儒教・仏教・道教などの代表者が出席した。西欧社会で生み出された宗教概念は、アジア諸国に持ち込まれるにおよんで、きわめて広い範囲で使われるようになった。しかし、中国古典籍における「宗教」の用例をひもとくと、近代の「宗教」概念よりさらに豊富な意味を持っていたことがわかる。「三教」もまた古来より使用されてきた言葉だが、「宗教」の融合という意味とは異なる。端的に言えば、三教思想は宗教概念以前の前近代に出現した思想であり、したがって、宗教の習合現象と見做されるのは不適切なのである。これは三教思想研究の大きな前提をなすものである。

以上の検討を踏まえて、本論文では以下のような結論が導かれた。三国世界観は、仏教の世界観に基づいて日本で派生したものである。日本・震旦・天竺が並べられることで、三国それぞれに対応する神道・儒教・仏教を並列のものとして考える可能性が見出されたといえよう。日本の神儒仏三教思想は、東アジアにおける文化的交渉、とりわけ日中の文化交流のなかで、長い時間をかけて形成された思想である。このような神儒仏三教思想は、江戸時代以前にはおよそ形成されていたが、江戸時代になると、幕府の政策や文化活動などの影響を受け、江戸中期以降、普遍的な思想体系となっていた。

神儒仏三教思想は江戸時代に最盛期を迎えたが、現代の社会にも影響を与えている。



今日の日本人の宗教観は曖昧なものである。神道・仏教・キリスト教といった諸宗教が、日本社会のなかで共存している。これら三教を習合させようという意志はほとんどみられないが、人々の認識に、信仰の世界で異質なものを排除しないという思想的な慣習が残っている。ここでは、「一神教」と「多神教」との区別についての論議が連想される。仏教・道教・神道・儒教などを「多神教」として理解すれば、三教思想はそうした「多神教」の外部にもう一つの「多神教」の輪郭を描いたと考えられる。このように、東アジアの信仰世界には自由な雰囲気が増え、多彩で多様な諸側面を見出せる。

## 博士論文審査結果

Name in Full  
氏 名 宋 琦

Title  
論文題目 江戸時代中後期における神儒仏三教思想——形態と構造の分析を中心に——

本論文は、概ね18世紀前半の、いわゆる神道・儒教・仏教の三教の習合・融合的な思想を説いた思想家たち、なかでも松宮観山・石田梅岩・白隠禅師の三人を中心に、その思想と歴史的・社会史的な背景について分析し考察したものである。

まず、本論文の構成であるが、序論に続いて、松宮観山の思想を分析した第一章、石田梅岩を論じた第二章、臨済禅の中興の祖と言ふべき白隠禅師とその弟子・東嶺円慈の思想を考察した第三章がある。そして、三教思想の後継者や批判者たちを概観した第四章、更には、結論と補論があり、加えて、松宮観山の個人史や近代以降の三教思想についての関連文献を網羅的に列挙した資料編とからなる。このうち、「序論」やこれと対をなす「補論」では、19世紀末の万国宗教会議などの事例を挙げて、いわゆる「宗教」概念が、近代西洋由来のものである点に、注意を促すとともに、東アジアに伝統的な「教」の概念について、むしろより包括的なものである点を論証している。

冒頭の第一章で扱われる江戸中期の儒学者、松宮観山は、神道・儒教・仏教の三教思想を唱えたほか、北条流の兵学や国学にも造詣が深い異色の思想家である。但し、取り分け、戦前期には、山県大弐の明和事件との関係などから、小糸夏次郎や亘理章三郎らによって、国民道徳や国家主義的な観点から、再評価がなされるなど、評価の基軸に関しても、やや偏りが存在した。戦後も、前田勉氏や小島康敬氏をはじめ、僅かな論攷を除けば、先行研究は極めて少なかった。しかるに、彼の思想を取り上げて、包括的に論じた上に、その個人史や歴史的・社会史的な背景にも説き及んだ本章は、本論文全体の中でも、最も特筆されるべき、中核ともなる部分で、大いに評価に値する。彼の思想は、当時の武士の自己意識、あるいは、自己肯定的・現状肯定的な自尊意識という点は、免れないものの、論争相手でもあった山県大弐などと比較すれば、現実主義的で、穏健・中庸な姿勢も明らかにされており、松宮観山の思想を当時の文脈に正当に位置づけ直して、彼に対する従来の評価を大きく改めている。なお、資料編では、彼の墓石調査の結果として、三教思想を唱えた観山自身とその子息ともども、霊神号と戒名の二つを刻する「神仏」式とも言ふべき異色の墓に葬られていること、また、『松宮観山集』と実際の墓碑文との相違を明らかにした点など、具体的・資料的な成果もまた、大いに特筆に値する。

第二章では、石田梅岩の心学を対象として論じる。松宮観山の三教思想が、為政者の立場からの民衆教化を目指していたのに対して、彼の心学は、朱子学をベースとしつつも、陽明学的な要素も加味した上で、民衆道徳・町人道徳としての三教思想を説いた点をバランス良く論じている。また、中国思想との比較の視点から、明末の林兆恩の三一教との類似性を指摘した点などに関しては、申請者なりの独自性や卓見が大いに認められる。但し、彼の場合、先行研究にも、相当な分量が存することもあり、全体として、既存の理解の枠



組に対して、必ずしもそれを超えるほどの新たな知見や観点は見受けられず、前後の章と比して、やや平板な印象も免れない。

第三章では、白隠禅に焦点を当てて、白隠慧鶴、及びその弟子の東嶺円慈らを祖上に載せて検討し、その再評価を試みる。中国仏教史の理解においても然りであるが、日本の仏教史に関しても、有名な辻善之助の通史以来、いわゆる「近世仏教墮落論」が通説化していたのに対して、近年、末本文美士、オリオン・クラウタウ、西村玲の諸氏らによって、批判的な修正の気運が顕著となり、本論もまた、そうした傾向に倣さすものと言える。取り分け、民衆的な思想や宗教、あるいは、民衆教化といった観点からは、当時も仏教の影響力が、依然として強かった点にも、正当にも留意している。なかでも、中国の宋明禅の影響下にあった白隠が、むしろ中国的な儒仏道の三教思想を標榜していたのに対して、弟子の東嶺円慈に至ると、日本的な神儒仏の三教思想に転化した推移などを跡づけて、当時の三教思想の多様性を明らかにした点は、大いに評価に値する。

第四章では、二宮尊徳、大原幽学など、その後の民衆的・在野的な三教思想と逆に富永仲基や山片蟠桃ら、その批判者を取り上げるとともに、文学や表現芸術の分野にも説き及んで、三教図の分析などにも取り組んでいる。やや総花的な感も免れないが、申請者の関心の拡がりや努力は、大いに多としたい。

本論文の全体を通じた評価を述べる。近年の江戸・徳川思想史研究は、その前期のみでなく中後期に焦点をあてて、儒学のみならず、国学や蘭学、仏教も視野に入れて、より複雑で多様な思想状況の内実を立体的に描く傾向を強めているが、本論文はその研究動向を踏まえ、中後期の思想状況の理解を一層、豊かにしたと言えよう。かつて、日本思想史研究では、伊藤仁斎や荻生徂徠らの如く、傑出した思想家に対して、焦点を当てる傾向が強かったが、実際に儒学が日本社会に定着していくのは、江戸・徳川時代の中後期であり、ややマイナーではあっても、当時の時代精神とも言うべき思潮を体現した思想家の研究も重要との認識が漸く顕在化しつつある。本論文は、こうした流れをさらに進め、当時の思想史的な流れの複数性・多様性・重層性を読み解こうとしている。具体的にいえば、三教が存在する江戸期の思想状況や、それに根ざした文化・社会の様相、武家や庶民に対する教育思想の一端などが、一層、具体的に明らかにされた。

注目すべき本論文の価値は、研究視野を、近世日本だけでなく、中国の明・清時代における儒教・仏教・道教の三教合一や三教一致に関する思想にまで拡げ、比較思想史的な観点からも考察を行った点である。その際に、最近のものも含めて、日本語・中国語・英語に亘る夥しい先行研究を博搜・渉猟しており、その点も大いに評価に値する。また、研究の方法や分析視角も優れている。三教という独創性の高い切り口で、近世日本の思想的特質を、中国を中心とした東アジア世界のなかに位置づけようと試みている。国際性や学際性を志向する本専攻の学位論文としてはもとより、世界史的な視野での今後の人文学の在るべきあり方に沿った研究として、高く評価できる。また、近代以降、宗教やイデオロギーの対立が激化する世界情勢に鑑み、異なる思想の習合や折衷を正面からとりあげた本論文の問題意識は、重要かつ普遍性があり、今後、関連研究の発展も期待できる。

勿論、本論文にも、些かの瑕瑾もない訳ではない。各々の思想家について、社会史・個人史の背景をふまえ、相互の思想・宗教的な立ち位置の違いを多面的に考察できている一方で、彼らの三教思想に関しては、やや予定調和的な共存や鼎立で描きがちな印象もうけ

る。思想家個々の思惑や三教の間での葛藤や拮抗について陰翳に富んだ叙述も可能であろう。また、松宮観山に関しては、いわゆる神仏習合や儒家神道との違いに加え、その反徂徠学の視点を掘り下げていれば、本論文の価値はさらに高くなっていたはずである。申請者が着目した三教思想は、近代以降のある種の国家主義思想や国民道徳、民衆宗教や新興宗教にも、存外、大きな影響を与えていた可能性がある。キリシタン禁制や公儀権力との関係、近世初期の沢庵や幕末の大国隆正の三教思想にもふれておけば、三教思想の成立と流れの動態をさらに力強く表現できたかもしれない。

しかし、以上の諸点は、むしろ申請者の向後の研究のための種子や萌芽ともなるべきものであって、本論文の切り開いた地平やその価値を些かも減じるものではない。審査委員会では、本論文の着眼や考察に見られる多くの卓見、思想史研究上の独自性や画期性、大きな資料的な価値などを踏まえて、全員一致で、本専攻の学位論文として相応しいものと認定した。